

第4回社会科理論研究会「学校と社会 第4章 初等教育の心理学（J・デューイ）」

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

「附属小学校（教育の実験室）」

教育理論の進歩にたいする貢献することが役割。発展する精神、正常な諸条件を最もよく充足し促進するような、材料および作用を探究する。いかなる材料と方法とが、いかなる割合と段取りにおいて、あたえられたる時期に間に合い、役立つかを決定する。

「現代心理学の傾向」

個々の精神をもって人間の社会生活の一機能（自分だけでは作用することも発達することもできないが、社会的諸力から不断の刺激をもとめ、その栄養を社会の供給に待つもの）とする考え方。

「これまでの教育の問題点（実態）」

教授のすべての要求は、外部的な事実の種々なるかたまりと子どもを直接に関係させることによって充たされると考えられていた。

教材なるものは全然外部的に教師の側に置かれていた（子どもに最大限にうったえ、子どもの生活にとって完全な意味をもつということは、教科が、たんなる外部的教科としてではなく、それが社会生活ととりむすぶ関連という見地から提示されるときにはじめて可能になるということが、忘れられていた）。

「教科」

知識を単なる項目としてではなくて、子どもの現在の要求および目的の有機的な部分として、同化されねばならない（学校における知識は孤立させられ、それ自身が目的とされていた）。

「真理の探求」

未知の領域における実験ということの意味する。ゆえに、およそこころみることを拒み、伝統に盲目的に固執することは、教育のなかに合理的な確信を導入しうる唯一の手段を拒否することにほかならない。

『初等教育における成長の三段階』

「第一段階（4～8才）」

社会的ならびに個人的な興味の直接性を、そしてまた、印象・観念および行動のあいだの関係の直接性ならびに迅速性を、特徴としている。

「第一段階の目的」

子どもが学校のそとにおける自己の経験の典型的な諸部面をそこで反復し、かくしてその経験を拡大し、ゆたかにし、漸次に整序するような学校の実現。

「第二段階（8～11・12才）」

「第二段階の目的」

子ども自身の、いっそう永続的な、客観的な結果に達しようという自覚の増大、および、そうした結果に達するために必要な技術上の諸々の手段を駆使することが必要であるという自覚の増大によって、子どものうえにおける変化を認識し、かつこれに応ずること。

「第三段階（中等教育との境界）」

子どもが現実の種々なる様相、活動の諸々の様式についてほんとうに直接的な知識をじゅうぶんに獲得したときに始まる。

子どもが、各種の経験にとって適切な方法（思考・探求・活動の道具にじゅうぶんに習熟して、技術的および知的目的のために諸々の特殊な研究や技術を有益に学び分けること）ができるようになったときに始まる。

「道具・技術（読み・書き・算＝言語・記号の習得）の重要性」

①社会がその諸々の知的営為の手段として過去において発達せしめてきたところの道具を意味する。

②子どもの限られた個人的経験のおよびうる範囲を越えて存在するところの社会的資産の富への扉を子どもにひらかしめる鍵を意味する。

「道具・技術の導入・使用に対する一定条件（要求）」

①社会的・自然的現実との接触・親近というゆたかな背景を、自分自身の個人的[体験的]な・いきいきした経験をつうじて子どもに獲得させるという要求。

②子どものより日常的な・直接的な・個人的[体験的]な経験が、その解決・満足・遂行のためには書物の力を借りることが必要となるような諸々の問題・動機・興味を提供するようにするという要求。

「道具・技術の導入・使用における問題」

①仕事・発表・表現・会話・構成および実験においてじゅうぶんに多量の個人的[体験的]な活動を子どもにあたえ、かくして子どもの道徳的ならびに知的個性が、書物によって押しつけられる不釣合に多量な他人の経験のために圧殺されることがないようにすること。

②子どもに伝習的な社会的道具の力をかり、これを駆使することの必要性を感じさせるようにいっそう直接的な経験をおこなわせること。

「シカゴ大学附属小学校の経験（研究）から見えてきたもの（可能性）」

①いっそう直接的な諸々の活動様式、すなわち、構成的・実際の作業、科学的観察、実験などが、読み方・書き方・数え方の必然的な使用のための豊かな機会を提供している。

②学科がこれまでになくいきいきしたものとなり、意味のあるものとなることによって、通常これらの学科に捧げられる時間を相当減少せしめることができる。

③読書・計算・作文、記号をぎりぎりの必要にせまられてつかうことは、より多く知的・能動的・力を増大するものである。

※まとめと感想

本章では、シカゴ大学附属小学校でデューイが見た子どもの発達について、心理学の見地から考察をしている。

特筆すべきは、言語（社会的道具）の習得に関する考察である。第二章において、デューイは言語を「思想を表現する手段」と定義した。本章では、言語を社会的道具と置き換え、その重要性や習得の条件、問題点などを指摘している。

「シカゴ大学附属小学校の経験（研究）から見えてきたもの（可能性）」でデューイは、社会的道具それ自体の習得を目的とするのではなく、経験的・体験的な学習を通じて、必要に迫られながら活用することで、より効率的に習得できると主張した。そのようなプロセスを経て習得された社会的道具は、より多く知的で能動的で、力を増大するものであるとも、重ねて主張した。

この主張を私は大変面白いと感じた。デューイのこの主張についても、会の皆さんと一緒に考えていきたい。